論文審査の結果の要旨

報告番号	博（経）甲第　31　号	氏　名	君野　里絵

学位審査委員		
	主査	宍倉　学　印
	副査	岡田裕正　印
	副査	丸山幸宏　印

題名：　高等学校における非認知能力育成のための効率性

論文審査の結果の要旨：

本論文は以下６章から構成されている。

第１章　研究の概要

第２章　非認知能力とは何か

第３章　アンケート調査結果

第４章　高等学校（商業科生徒）における非認知能力育成の効率性測定

第５章　Tobit 回帰分析を用いた効率性の要因分析

第６章　本論文の総括と展望

本論文は、計量的方法を利用して、高等学校における非認知能力の育成の効率性を評価するとともに、非認知能力を効率的に育成するために必要な要因について分析を行っている。具体的には、筆者が在籍した商業高校の生徒に対して非認知能力に関するアンケート調査を実施し、同結果をもとにDEA（包絡分析）法を用いて認知能力育成の効率性を評価することで、同手法の使用が非認知能力の測定に簡便かつ客観的な方法となりうることを示している。加えて、これら効率値がいかなる要因と関連しているのかを実証的に分析している。これにより非認知能力の開始時期としては遅いとされる高等学校においても、その育成は可能であることを示そうとした研究である。

各章の概要は以下の通りである。

第１章では、本論文の着想に至った経緯、研究目的及び論文の概要を整理している。また日本の教育現場に非認知能力の評価が導入されるまでの経緯と評価の際の課題がまとめられている。新たな学習指導要領の運用開始に伴い、我が国の教育現場でも非認知能力の評価が本格的に導入されつつあるものの、その一方で非認知能力が幅広い意味を内包していることから教育現場においては少なからぬ混乱が生じており、同能力を客観的に評価する方法を確立するとともに、これを活用した指導手法を構築することが急務になっていることを示している。

第2章では、非認知能力に関する先行研究をもとに、本論文で扱う非認知能力を定義している。具体的には、ビッグファイブ性格因子に関連するスキルから、「非認知能力」を、「やり抜く力」「忍耐力」「満足 遅延耐性」「達成努力」「向上心」「勤労意欲」「協調性」「自尊心」「自己効力感」と定義している。

第3章では、本論文の分析で利用しているアンケート調査の概要とその結果がまとめられている。前章で定義された非認知能力に関する項目（「やり抜く力」「忍耐力」「満足 遅延耐性」「達成努力」「向上心」「勤労意欲」「協調性」「自尊心」「自己効力感」）と関連する調査結果がまとめられている。また調査票作成に際して参照した先行研究の調査結果との比較を行うことで、本調査の特徴及び独自性が示されている。

第4章では、アンケート調査結果のうち入力変数として4つの質問項目、出力変数として5つの質問項目を利用し、4つの異なるDEAモデル（BCC-O：出力指向BCCモデル、CCR-O：出力指向CCRモデル、SBM-O-C：出力指向規模の収穫一定SBMモデル、SBM-O-V：出力指向SBM規模の収穫可変モデル）によって、生徒の非認知能力育成の効率性を測定した結果が示されている。また教育においてDEA法を利用した先行研究の結果がまとめられおり、本研究の独自性が示されている。加えて効率値が低い下位5人を取り上げ、効率値を低下させている原因を個別に分析し、改善案を提示している。

第5章では、前章で計測した各効率値を被説明変数、他のアンケート回答結果（15個）を説明変数として、Tobitモデルを用いて効率性を左右する要因の分析を行っている。具体的には、説明変数とした質問項目を家庭環境要因Ⅰ、家庭環境要因Ⅱ、自尊心要因の3つに分類し、これらの要因が高等学校教育における非認知能力育成の効率性に与える影響を分析している。結果、家庭環境要因Ⅰ・Ⅱに有意な関係が示されることから、非認知能力育成を効率化するには、保護者の生徒個人への関心度が重要な役割を担う可能性があることが示されている。

第6章では、これまでの章の分析結果をもとに総括と今後の展望を述べている。特に、高等学校教育において非認知能力を効率的に育成するうえで必要な要因として、「専門科目への積極的な取り組みをさらに拡充させること」と「家庭との新しい連携方法の構築」を取り上げ、高等学校の教育現場に対する提言を行っている。

「博士学位論文の審査基準」として示される独創性，新規性，貢献度，論証可能性，論文の完成度に関して、本論文の評価は以下の通りである。

① 独創性，新規性

現在、主観的な評価に依存せざるを得ない非認知能力に対する評価に際し、DEAによる効率値に基づいて定量的に評価したという点で本研究は独創性を有している。さらに非認知能力育成の効率性の評価に際して、複数のDEAモデルを用いて総合的に評価した例は先行研究にもなく、新規性があると考えられる。

② 貢献度

本論文では、非認知能力の育成に対して、DEA を用いることでこれを数量的に捕捉する方法を提示するとともに、同能力を効率的に育成するために必要な要因を実証的に明らかにしている。非認知能力の評価及び育成のために DEA を組み込む手法を構築し、指導法改善の道筋を示したことは本研究の重要な貢献と評価できる。これにより、教育において必要な指導のポイントが可視化され、非認知能力への客観的評価が進むことが期待できる。

③ 論証可能性

独立商業高校に在籍する 3 年生 161 人に対するアンケート調査に基づき、DEA を用いて非認知能力の育成評価のための評価値を導出し、Tobit 回帰分析を用い DEA の効率値と非認知能力育成の環境要因との関係を導出している。各手法は確立されたものであり、いずれも論証性は確保されている。また利用した調査票やそのデータも論文内に提示されていることから、結果の再現性も担保されていると言える。

④ 論文の完成度

予備審査において改善及び再検討が必要と指摘された点に対しては、真摯な訂正が行われたと言える。しかし、最終審査に提出された論文では、予備審査での指摘事項の修正・追記部分を中心に、誤字脱字、図表や参考文献の提示に不備が散見され、完成度の点から見たときに不十分な点がみられた。また予備審査での指摘に従って内容を再考したところ、分析結果が大きく変化したことや、利用した効率性の値によって結果にかなりの違いが生じているなど、更なる検証が必要と思われる点が残されている。加えて最終章の含意や提言についても、分析結果との関係の考証が十分ではないといった問題もあった。ただし、いずれも更に分析を進めることで今後十分対応が可能なものであり、論文全体の主旨を損なうほどの問題ではないと考える。

以上、論文の完成度という点で課題は残るものの、これらは今後の研究によって十分改善可能なものであると判断する。一方、独創性・新規性、貢献度、論証可能性という点からは、学位論文としての水準には達していると判断できる。以上の評価により、本学位審査委員会は、本論文が学位審査基準を満たすものと判断し、全員一致で博士（経営学）の学位に値するものと判断する。